13 読書 12版　平成20年(2008年)5月11日　日曜日　産経新聞　<第三種郵便物認可>

読書

著者に聞きたい

『遊女のあと』（新潮社・1995円）

諸田玲子さん

名古屋舞台の時代小説

「江戸時代を舞台にした人情もの時代小説というと、深川など江戸の町を舞台にしたものが多い。でも地方にもさまざまな立場の人がいて、さまざまな暮らしがある。そんな、あまり知られていない、地方を舞台にした人情味のある時代小説を書いてみたかったんです」

『遊女のあと』は、徳川幕府の八代将軍、吉宗の時代を描く。江戸の御家人、高見沢鉄太郎は男と逃げた妻を追い、筑前（今の福岡県）の漁師の女房、こなぎは謎めいた異人を助けるために夫の家から逃げ出し、東と西からそれぞれ名古屋をめざす。名古屋にたどりついた2人は偶然出会い、引かれ合うが、質素倹約を柱とする緊縮政策で改革を進める吉宗と、芝居小屋や遊郭を誘致、開放政策で名古屋を発展させようとする尾張徳川家の当主、宗春との反目に端を発する幕府と尾張徳川家の対立に巻き込まれる。

鉄太郎は体面を重んじる譜代の家に生まれ、厳実直な直参の武士で、なぜ妻が自分のもとを去ったのか理解できない。こなぎも故郷の筑前では、理不尽な夫にやりきれない思いを抱きながらも従うしかなかった。そんな2人が、宗春の開放政策でにぎわう名古屋で、江戸や筑前では思いもよらない生き方をしている人々に出会うことで、しだいに変わっていく。

「江戸時代、これだけ立場の違う2人が出会い、心を通わせ合うことは本来ないはず。だけど死罪が一切行われなかったなど、リベラルな雰囲気で活気のある名古屋ならこんなこともあり得た。〝入鉄砲と出女〟のイメージで女性の旅行は厳しく規制されていたと思われているけれど、当時の資料を当たると、伊勢詣りなど女性も活発に移動していたことがわかる。歴史の常識でははかれない、江戸時代のエネルギーを感じ取ってもらえたら」

（栫井千春）

◇

もろた・れいこ　昭和29年、静岡県生まれ。平成8年『眩惑』でデビュー。15年、『其の一日』で吉川英治文学新人賞。19年、『奸婦にあらず』で新田次郎文学賞。

「赤い皇帝」の全体像詳細に

『鄧小平秘録』上・下　伊藤正著　（扶桑社・各1785円）

評・中嶋嶺雄（国際教養大理事長・学長）

中国の赤い皇帝・鄧小平を語ることは、今日の巨大な問題国家のすべてを論ずるに等しい挑戦的課題だといえよう。共同通信社そして産経新聞社の記者として、文化大革命で打倒されたはずの鄧小平が奇跡的な復活を遂げ、再び失墜した1976年の第1次天安門事件を現場取材し、さらに本来は改革派であるはずの鄧小平が強権を発動して民主化運動を武力制圧した1989年の第2次天安門事件を目撃している著者は、鄧小平が直面した権力闘争、改革・開放の総設計師としての全体像を詳細に描いている。

鄧小平についての著者の基本的視点は、「経済に関しては、社会主義の枠を突破する改革派だったが、政治に関しては確固たる保守派だった」というものである。そしてこの点こそが、鄧小平論のもつ今日性であり、中国社会が当面している深刻な矛盾である。

本書は「産経新聞」紙上で平成19年2月から今年2月まで連載された「鄧小平秘録」を本にしたものであるが、本書の最大の特色は、鄧小平に関する膨大な資料を収集し駆使して、きわめて実証的に鄧小平の人間像や苦悩、さらには毛沢東、周恩来、林彪、華国鋒、江青ら「四人組」、胡耀邦、趙紫陽、江沢民ら中国共産党首脳との複雑な政治的・人間的関係を解きほぐしていることである。

私自身は文化大革命開幕期の1966年秋、孫文生誕百周年記念大会で周恩来総理が「毛主席万歳！」を絶叫して明らかに壇上の劉少奇と鄧小平を批判したときの鄧小平の復讐心に満ちた表情が今でも脳裏に焼きついているが、著者は上巻では天安門事件、南巡講話、文化大革命と遡り、下巻では毛沢東の死から最近の「先富論」の遺産までを丹念に分析している。

本書の刊行によって、産経新聞社は1970年代に『蔣介石秘録』全15巻を、1990年代には『毛沢東秘録』（上下）を、そして今また『鄧小平秘録』を世に送り出したことになった。

◇

いとう・ただし　産経新聞中国総局長兼論説委員。昭和15年、埼玉県生まれ。

明解で論理的な演劇批評

『舞台を観る眼』　渡辺保著　（角川学芸出版・1995円）

評・藤田洋（演劇評論家）

演劇に構成があるように、この本にも構成がある。白洲正子からはじまり、最後は折口信夫。中幕風に三島由紀夫と久保田万太郎という、およそ結びつかない2人の戯曲を論じ、その間に演劇批評やエッセーを挟んでいる。

白洲の本の取材に同行して、その人柄に直接ふれてカルチャー・ショックを受けた「旅日記」が興味ぶかい。著者は、この実業家夫人で能に造詣の深い、すぐれた文章家に憧れ、その生き方を学ぼうとしている。

久保田万太郎の戯曲を評した石川淳の「東京の下町に〝実在の原型はありえない〟。ご当人が『浅草』と書いたにしても、今はもとより、そういう浅草はかつて存在しなかった」という一節から、久保田戯曲の反リアリズムの特質を引き出していく。

その論法は、対象を分析して3点とか4点とか、整然と形をととのえて喝破してみせる。学生時代に加藤周一の『政治と文学』によって目をひらかされた。「私は芸人が名人の芸を盗むように加藤周一の文章の芸を必死になって盗んだ」と書く。

なるほど。論理とはそうしたもので、さまざまな芸能は論理の剣によっていとも明快に切り裂かれていく。だから、歌舞伎ばかりでなく、近代劇も、ベジャールも、大野一雄も同一線上で批評できるのである。

白洲正子からはじまったエッセー集は、折口信夫がトリになる。折口は、六代目菊五郎に興味をもち、もっとも愛していたと論考する。そして著者の少年時代に観た「六代目の芸には観客の心を斬る鋭さがあった」と書き、さらに「そこにこそ六代目の真骨頂があって、それ以外のどこにもなかった」と続ける。

これが論理的な評価というのだろう。

「舞台の実相に迫りたい」とする著者の、〝観る〟姿勢で貫かれた一冊。

ところどころに美食の本験が挿入されているのがうらやましくもあり、憎らしくもある。

◇

わたなべ・たもつ　昭和11年、東京生まれ。慶応大卒。東宝を経て演劇評論家。『女形の運命』など。

近代

『日と月と刀』上・下　丸山健二著　（文芸春秋・上2500円、下2150円）

評